



2月号

令和4年1月31日発行
調布市立石原小学校
校長 江原 幸一

<http://www.chofu-schools.jp/isiwara-sho>

勇気の一步

副校長 三瓶 邦吉

「言うは易く、行動は難し」ということわざがあります。勇気をもって行動することは、言うことは易いですが、行動することは難しいことであると誰もが頷くところだと思います。このところ、朝が寒いので布団から起き上がるのが一苦勞です。その時は、思い切って起き上がるために、自分の心を「よいしょ」と持ち上げるちょっとした勇気が必要になります。

二学期末、東京2020パラリンピック水泳(バタフライ視覚障がいクラス)でみごと金メダルを獲得した木村 敬一選手にご講演をいただいたことは1月号に掲載しました。木村選手は、ロンドン大会で銀銅の2個、リオデジャネイロ大会で銀銅4個のメダルを獲得していましたが、金メダル獲得には至っていませんでした。リオパラリンピックまでの4年間、これでもかというほど頑張っ練習し、やり残しなども微塵もなかったそうです。しかし、金メダル獲得という目的を果たせなかったのです。これまで過ごした日本の環境で、もうこれ以上頑張ることは不可能だと感じられたそうです。

そこで、木村選手は、心機一転2018年、「東京パラリンピックで金メダルをとるために、アメリカで一人から頑張ろう」と武者修行へとアメリカに練習拠点を移す決断をしたのです。「ほとんど英語が話せない。」「知り合いはいない。」「視覚に障がいがある。」「たった一人で行くのは危険である。」そんな状況の中で、木村選手はもの凄く勇気のある決断をしたと思います。

(参考:『闇を泳ぐ』全盲スイマー、自分を超越して世界に挑む。 木村敬一著)

5年生の3学期は、最高学年のステージで求められる力を意識し、1月をスタートしています。6年生は、昨年11月末より卒業文集に取り組み、小学校生活の思い出や中学校生活・将来に向けての抱負や夢を文章にまとめる作業を進めてきています。

6年間の学校生活の学習や行事を振り返って、不安だった気持ちから頑張れた自分に成れたのは、友だち

や先生、家族、スポーツのコーチ、地域の方々の支えのおかげであると感謝していること、また、中学校生活や将来を迎えるにあたって、部活動と勉強の文武両道に挑戦していこうとする思い等が数多く記されていました。さらに、将来の夢として、自分の性格や趣味を生かしたいという人、医療関係に従事し、病気を治すことに貢献したいという人、空港で飛行機を誘導したりするグランドハンドリングスタッフに携わりたいという人、動物たちの役に立ちたいとペットシッターになりたいという人、甲子園のマウンドに立ちたいと決意している人、地球温暖化防止に尽力したい人、裁判官になって平和を守りたいという人、人を楽しませるアニメーターを目指す人、アガサクリスティーに憧れ、推理小説家になりたいという人等々熱い思いが綴られていました。多くの6年生に共通していることは、「支えてくれた人がいたから、様々なことに挑戦する勇気をもつことができた。」ということです。

5年生にとっての3学期は「6年生の0学期」、6年生にとっては「中学1年生の0学期」と言えると思います。他学年も同様です。それぞれの学年が次の学年の「0学期」として、残り2ヶ月間、進級・進学ステージへと勇気をもって「これまで」から「これから」の自分へと意識を高めていってほしいと願っています。

2月1日は、石原小学校の開校記念日です。6年生の文集からも伺えるように、“人と人が支え合い、互いを大切にする”石原小伝統の「和の教え」が受け継がれているように思います。1年生へのお世話やたて割り班の班長、委員会・クラブ活動等の長として、役割を果たした6年生の喜びがありました。5年生もきつと、6年生の頑張りや励ましを受け継ぎ、あこがれの最高学年へと成長していくものと確信しています。

保護者、地域の皆様、今後とも子どもたちを見守り、支えていただければ有難い限りです。